

2023年3月19日

## 世界の人びとのための JICA 基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要	
(1) 事業名	「ラオス保健科学大学における新生児蘇生法インストラクターの人材育成プロジェクト」(通常枠)
(2) 実施団体名	認定 NPO 法人あおぞら
(3) 実施期間	2022 年 3 月 15 日～2023 年 3 月 14 日
(4) 実施国	ラオス人民民主共和国
(5) 活動地域	ビエンチャン
(6) 活動概要	<p>1) 活動の背景：</p> <p>世界の 5 歳未満死亡率は改善傾向にあるが、新生児と言われる生後 28 日未満の赤ちゃんの死亡の減少は緩慢である。世界では出産当日に 100 万人の新生児が亡くなっており、その 4 分の 1 は、出産直後に呼吸・循環が不安定な状態である新生児仮死が原因と言われている。ラオスにおいても、新生児死亡率は年々減少傾向にあるが、1000 出生に対し 18 (LSIS (Lao. Social Indicator Survey) II, 2017) と未だに高く、ラオスにおいて改善されるべき保健指標の一つである。ラオス人民民主主義共和国 (以下：ラオス) の新生児死亡の原因の 29% は新生児仮死であるといわれている (WHO, 2015)。新生児仮死については、新生児蘇生法を身につけた医療スタッフが出産の場に立ち会い、適切な処置を行うことで、新生児仮死の内の約 9 割を救う事ができることがわかっている (日本版救急蘇生ガイドライン 2015)。</p> <p>日本においては日本周産期・新生児学会が 2007 年に新生児蘇生法普及委員会を設立し普及活動を開始し、国際蘇生連絡委員会の『Consensus on Science with Treatment Recommendations』に基づく講習会を行っており、受講後に新生児蘇生法修了認定資格を得られるシステムが確立されている。国際的には WHO が 2012 年に基本新生児蘇生法ガイドラインを策定している。しかしながら、ラオスの医療者育成課程では新生児蘇生法の習得カリキュラムが組み込まれておらず、そのため、医師・助産師・看護師などの医療従事者は、就職後、実際に臨床現場に出たから、現場で技術を習得している状態である。そのため、ラオスでは新生児蘇生法の正しい知識と技術を持って実践的な研修を提供できる人材が少ないため、国内に新生児蘇生法訓練指導員を養成し、訓練を通してその技術の認知を高め、臨床で蘇生法を実践できる人材を増やすことが必要な状況である。</p>

## 2) プロジェクト活動内容

本プロジェクトは、ラオス国内の医師の育成機関であるラオス保健科学大学（以下：UHS）で、教員向けの新生児蘇生講習会を定期的で開催し、基本的な新生児技術蘇生法の定着とともに、UHS に所属する医師の中からインストラクター養成者の選定を実施するものである。ラオス人医師が自ら新生児蘇生法講習会を開催できるインストラクターになることで、新生児蘇生法を「ラオス人からラオス人の手」へ伝えていくことができる持続可能な社会の実現への支援を狙っている。

中間目標（2022年度）：

- ① 現地人医療者の育成機関である UHS で、新生児蘇生講習会を開催する
- ② 定期的な新生児蘇生法講習会の実施により教員の新生児蘇生法の知識・技術が定着する
- ③ 新生児蘇生法インストラクター候補生（UHS 所属の医師）の選定を行う

※本基金事業にかかる活動は、中期目標の達成を目標とした。現地のカウンターパート（UHS）とオンラインをベースに意見交換を行い、新生児講習会を実施とインストラクターの選定までとした。コロナ禍により渡航に制限があったため、オンラインで実現可能なことを優先した。そのため、医療機関などの直接的な支援先ではなく、すでにコンタクトがあり、医療人材の育成という意味で大きな役割をもつ UHS を現地カウンターパートとして活動を行った。

長期的目標（2023年度～）：

- ① インストラクター候補生による模擬講習会が実施
- ② 継続的なインストラクターの人材育成
- ③ ラオス人医学生・助産・学生が卒業後に現場において医療職者の手で新生児仮死の状態にある新生児を適切な状況で新生児蘇生法を実施できるようになる新生児蘇生法講習のシステム構築を目指す



▲プロジェクトのイメージ図



▲プロジェクトの段階を示した図

## 2. 業務実施結果

### (1) 実施した内容

主な活動の実施内容は以下の表に示す

日程	活動内容	実施方法
2022年3月	キックオフミーティング	オンライン
2022年6月	第一回新生児蘇生法講習会 (知識・技術のレクチャー)	オンライン
2022年7～10月	技術確認テスト(各月)	オンライン
2022年9月	第二回新生児蘇生法講習会 (技術確認フォロー)	ビエンチャン開催
2022年11月	第三回新生児蘇生法講習会 (インストラクター候補生選定)	ビエンチャン開催
2023年2月	プロジェクト評価・次年度に向けての話し合い	オンライン

上記内容について以下に実施内容の詳細を記載する

#### 【実施内容①第一回新生児蘇生法講習会】

日時：2022年6月16日

ラオス時間 13:30～16:30 (日本時間 15:30～18:30)

場所：チルドレンホルピタル(ビエンチャン)

方法：日本からオンラインにて実施

目的：新生児蘇生法のチャートを理解、評価方法がわかる

蘇生技術(気管内挿管を含む)を適切に、実施できる

参加人数：ラオス人医師(候補生)12名+ファシリレーター3名

講習内容：新生児蘇生法の概論

新生児蘇生法の基本的な実技

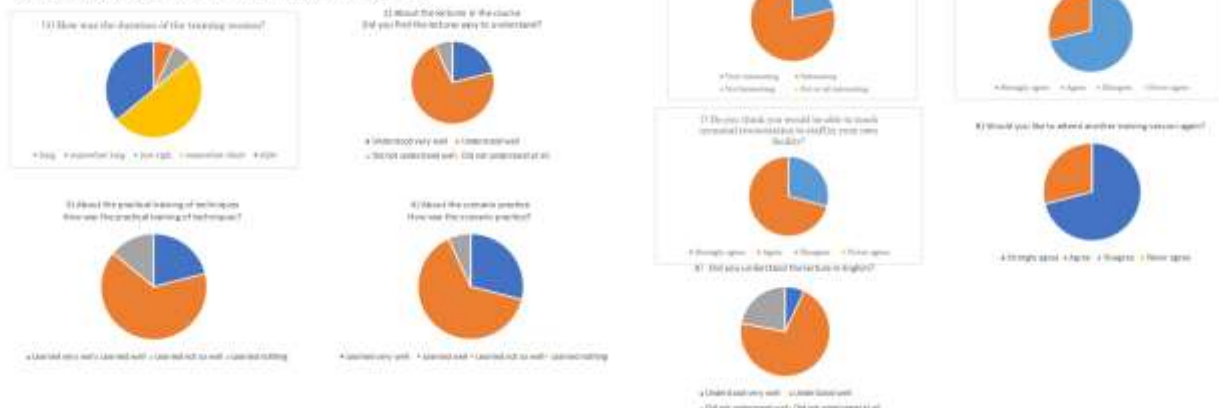
プレ/ポストテスト結果：

#### Pre/Post Test

Question	Correct answer rate	
	pre	post
1) Which of the following is correct regarding the frequency of requiring positive pressure ventilation(PPV) in a full-term baby? (A. 5%)	20%	80%
2) Which combination of the following is the correct assessment item in the immediate postnatal period for a full-term baby? (A. Muscle tone, Respiration)	20%	80%
3) Which of the following is incorrect in routine care? (A. Administering oxygen.)	20%	77%
4) Which of the following is the correct suctioning procedure for a full-term baby with clear amniotic fluid? (A. Suction is applied to the mouth and nose in that order)	42%	100%
5) Which of the following is correct for airway opening? (A. A sniffing position is effective.)	67%	100%
6) Which of the following is correct regarding the number of times to administer single positive pressure ventilation(PPV)? (A. 40-60/min)	50%	100%
7) If the chest does not rise after positive pressure ventilation(PPV), which of the following is a possible cause? (A. Oral secretions, Inadequate ventilatory pressure, Inadequate mask adhesion, Improper airway positioning)	100%	100%
8) Which of the following is correct regarding chest compressions? (A. Perform one cycle in 1 seconds)	20%	80%
9) The tracheal intubation tube used for a 40-week, 3000 g baby should be <input type="checkbox"/> Fr and inserted <input type="checkbox"/> centimeters. Which combination is correct? (A. 5.5, 4.0)	30%	80%
10) After the initial procedure, the heart rate is 40/min and the patient is apneic. Which of the following is the correct procedure to be performed next? (A. Positive pressure ventilation(PPV).)	20%	80%

## アンケート結果：

### Questionnaire after the course



- ・ プレテストよりポストテストの結果は明らかに上昇しており、知識の習得ができたと評価した。
- ・ 当初の予定では、6月と11月の2回の講習会を実施予定としていたが、2回の講習会ではインストラクターになるための技術の定着が十分に出来ないことが懸念された。そのため、講習会後のミーティングでは追加で講習会を実施が協議された。その頃には新型コロナウイルスによる渡航制限が緩和されたこともあり、オンサイトでの追加の講習会を9月頃に実施することにおいて双方の合意を得た。
- ・ カウンターパートより、「講習会は良いものであった。プレポストテストでは前後比が上昇していてよかった。参加者からは、講習会が短かったとコメントがあったが、他の講習会に比べたらという感じで、本講習会においてはちょうどよかったと思う。」とコメントがあり。
- ・ 講習会では、カウンターパートが主体的にコーディネートしており、カウンターパートがプロジェクトの意図を理解し、候補生に関わってくれていた。

### 【実施内容②オンライン動画スキルチェック】

日時：2022年6～10月の各月

方法：候補生に動画を撮影し、各自クラウドにアップロード

内容：人工呼吸・心臓マッサージ技術  
右図で撮影方法・提出方法を明示した

3人のファシリテーターを中心にUHSサイドでチェック予定となり、主体的にカウンターパートがプロジェクトに取り組む姿勢がみられ、12人全員の提出があった。

### Confirmation of skill check

The image shows a project plan and a confirmation of skill check form. The project plan includes a table with the following data:

Task	Start	End	Status
2022 Training Course	Jan 2022	Jan 2022	Completed
Confirmation of skill check	Jun 2022	Jun 2022	In Progress
Submission of video	Jul 2022	Jul 2022	Not Started

The confirmation form includes the following instructions:

1. Uploading a video: Please upload the video to a Google Drive. The URL for the video is in the link. Please make sure to put your name and your position in the file name. (Use File > Add Link > Share)
2. Giving feedback: Please make sure to check the video and give your feedback.

**【実施内容③第二回講習会（新生児蘇生法スキルチェックフォロー）実施】**

日時：2022年10月23日

ラオス時間 9：00～16：00（日本時間 11：30～18：00）

場所：UHS（ビエンチャン）

方法：現地対面にて実施

参加人数：ラオス人医師 10 名

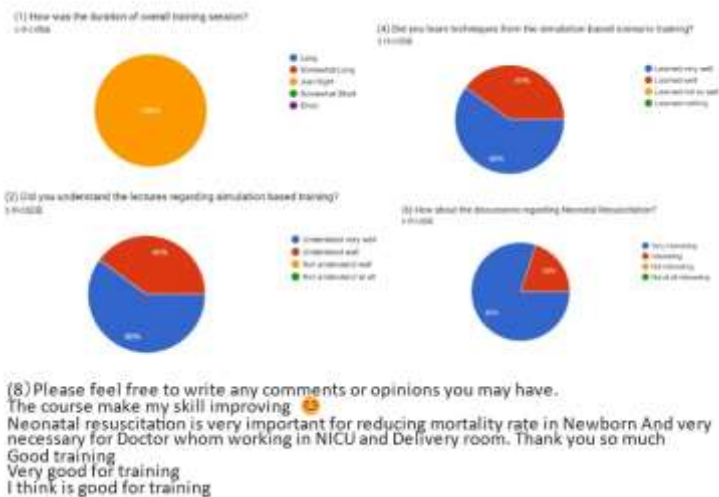
不参加理由：海外出張 1 名、交通事故 1 名

目的：インストラクター候補生が、新生児蘇生法に関する正しい技術を獲得できる  
インストラクター候補生とあおぞらの信頼関係構築

講習内容：シミュレーションを基盤としたシナリオトレーニング  
新生児蘇生法の実技の実施/フィードバック

アンケート結果：

Questionnaire after the on-site skill check



・講習会アンケート結果（左図）では、満足度が高く認められた。

・現場でスキルチェックに当たった講師からはインストラクター候補生はスキルが高く、8～9月のオンラインでのスキルチェックが効果的であったのではないかとコメントがあった。

・現場では、新生児蘇生法物品に関する機材のメンテナンス不足な物品が多く認められたため、インストラクターとして正しい機材のメンテナンス方法を指導について団体内で協議した。

・フリーコメントでは「この講習会で自身のスキルが向上した」「新生児死亡率の減少には新生児蘇生法は非常に重要であり、NICU や分娩室で勤務する医師に必要である。このような良いトレーニングをありがとうございます」「とても良いトレーニングです」などと本講習会に非常に前向きなコメントが多くみられた。

**【実施内容④第三回新生児蘇生法講習会（インストラクター候補生選定）実施】**

日時：2022年11月25日

ラオス時間 9：00～16：30（日本時間 11：30～18：30）

場所：チルドレンホスピタル（ビエンチャン）

方法：現地対面にて実施

参加人数：ラオス人医師 9 名

目的：インストラクター候補生が、新生児蘇生法に関する正しい知識と技術を獲得できる  
受講生がインストラクターとしての自覚を持てる



講習内容：新生児蘇生法インストラクターの概論

模擬事例の作成を行い、その事例にてインストラクションの実技の実施  
インストラクターに必要な医療機器キットの作成

アンケート結果（右図）：

・セミナー中は、参加者の主体性に重きを置き、メインは英語で実施はするが、可能な範囲でラオス語を極力使用するような形で講習会を進めていった。

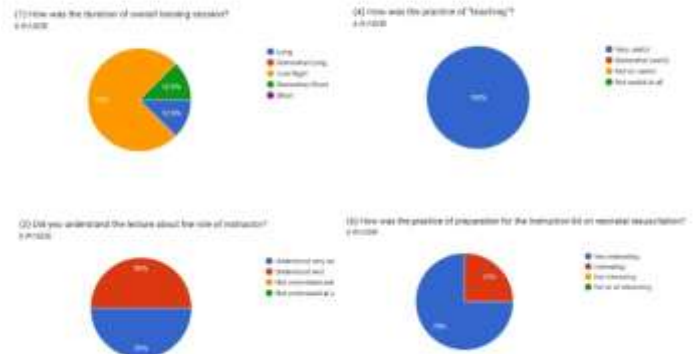
・フリーコメントからは、「優しいインストラクターになりたいと思う」などと講習会を通して、自身のインストラクター像を形成するきっかけとなったことを示すコメントもあった。

・その他コメントでは、「とても良い機会だった」「このプロジェクトを続けてほしい、小児科のスタッフや研修医に対して機材のトレーニングを行ってほしい」などの意見も上がった。

・アンケート結果より研修時間や内容について満足度の高い結果であった。

・本プロジェクトでは最終、9名インストラクター候補生が認定となった。

Questionnaire after the course 2022.Nov.25<sup>th</sup>



### 【実施内容⑤UHS と本プロジェクト評価・次年度に向けての話し合い】

日時：2023年2月9日

方法：オンライン

内容：本プロジェクトの評価

次年度に向けての計画立案

・コロナ禍における活動であったが、予定を適宜変更しながら密にコミュニケーションをとり、本プロジェクト目標は無事に達成できたことを評価した。

・本活動の実績もあり、UHSは既に新生児蘇生法訓練を各プログラムに導入することを公式に決定し2023年には実施を予定しているとの報告を得た。次年度も引き続きプロジェクトを協働して実施していくことに合意を得た。

### 【実施内容⑥UHS と定期的なミーティング】

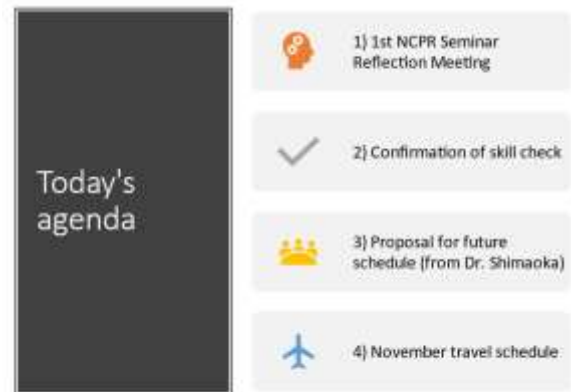
・プロジェクト期間中、適宜UHSとオンラインミーティングを実施した。UHSの状況やプロジェクトの進捗状況に合わせ、柔軟に時期設定を行いながら密にコミュニケーションを取りようにした。

・講習会の後には必ず実施したアンケートを共有し意見交換を行った。そこで出た意見などを参考にプロジェクトの計画を評価・適宜修正を行っていった。

・円滑にコミュニケーションが図れるように、右図のようなアジェンダと資料をパワーポイントで用意してスライドを共有して話し合いを行った。事前基本的には zoom で一回 30 分～1 時間程度の時間で実施した。

・概ね 1～2 ヶ月に一度のペースで行ったが、講習会の直前などは細かな打ち合わせや接続確認も含め、頻回なミーティングを実施したが、オンラインでの講習会に徐々に慣れ、三回目の講習会では事前の打ち合わせは一度のみで他はメールベースのやり取りであった。

・ミーティング当日にカウンターパート側に緊急手術対応が入り、カウンターパートがミーティングに出席できないとの連絡があったが、20 分遅れて参加、忙しい時も合間をみてミーティングに参加してくれる様子から前向きにプロジェクトに取り組んでくれている様子を感じた。



#### 【実施内容⑦関連機関とミーティング】

・JICA 筑波、JICA ラオス、ラオスコンソーシアム会等、関連組織・団体へ本プロジェクト概要説明を行い、意見交換を実施した。

・活動期間中においても、進捗状況の報告、情報共有や連携など行った。

・活動に興味を示してくれた現地で活動している NGO 職員や、JICA 海外協力隊も参加するきっかけとなった。

#### 【実施内容⑧JICA 市民参加協力事業紹介セミナーにて発表】

日時：2023 年 2 月 24 日

内容：本事業の取り組みについて、セミナー「助かる命を救いたい！～日本の大学・企業・NPO のラオスでの保健医療改善への思いと取組～」(JICA 筑波主催)にて登壇

[https://www.jica.go.jp/tsukuba/event/2022/230213\\_01.html](https://www.jica.go.jp/tsukuba/event/2022/230213_01.html)

(セミナー詳細 URL)

・セミナーには、一般般市民 60 名が参加いただいた。

・セミナー参加者からのアンケートフリーコメントより、「命を助ける方法を教えるという重いミッションを、オンライン上で行うという大きな壁を乗り越えて、コロナ禍でも活動を続けられていたこととても尊敬します。」「貢献度の高い活動であると思いますので、今後も継続した活動を行っていただき、ラオスと日本の懸け橋になっていただきたいと思います。」など前向きなコメントを頂いた。

## **(2) 実施成果：**

### **1) インストラクター候補生の新生児蘇生法に関する知識と技術の向上**

現地人医療者の育成機関である UHS で、同大学医師とともに、新生児蘇生講習会を 3 回開催した。講習会の参加者は講習会前後でのテストで明らかに知識の向上を認めた。また、技術面においても各講習会に加えて毎月のオンラインにおける課題提出により技術テストを行い、技術の向上を認めた。

### **2) 9 名のインストラクター候補生の選出**

上記の講習会およびオンラインでのモニタリングの実施を通じ、新生児蘇生法の知識・技術を身に着けた新生児蘇生法インストラクター候補生（UHS 所属の医師）を 9 名選定した。候補生のコメントでは、「優しいインストラクターになりたいと思う」などと講習会を通して、自身のインストラクター像を形成していく姿もあった。

### **3) カウンターパート主導でプロジェクトの継続**

本活動の実績もあり、UHS は既に新生児蘇生法訓練を各プログラムに導入することを公式に決定し 2023 年には実施を予定している。本事業では「首都の病院に勤務している医師（大学教員）」を対象としていたが、今後は、医師だけでなく、助産師・看護師インストラクターの養成希望や、都市部だけでなく、地方へも展開の声も上がっており、事業を展開継続していく意向を受け、今後も支援予定である。

### **4) 本事業を通して一般市民に向けての国際協力の広報活動**

JICA 市民参加協力事業紹介セミナー「助かる命を救いたい！～日本の大学・企業・NPO のラオスでの保健医療改善への思いと取組～」(JICA 筑波主催)には、一般市民 60 名が参加いただいた。

セミナーでの発表を通して、ラオスの現状や、国際協力の支援の実際や国際協力に携わる支援者の思いなどについて多くの方に知ってもらう機会となった。



### (3) 得られた教訓など：

#### 1) コロナ禍での事業運営

・コロナ禍の状況であり、海外渡航の可否は直前まで判断がつかないことが多かった。そのため、渡航の可否が不透明な時期から、暫定的に講習会のオンライン版、現地版の両方の研修の骨組みだけは作っておくという判断をしたことがよかった。ラオスのお国柄、事前に計画よりも直前に計画変更などの流動的な環境の中での事業運営に慣れていたため、流動的にスケジュール計画、その際には流動的な環境の中でのめごとを計画実施する際に、大枠→詳細という順番で作るようにした。

・渡航できない場合を想定し、技術確認などは、現地インストラクター候補生に新生児蘇生法の技術をオンラインで動画撮影をしてもらい、毎月課題を課して、その内容をクラウドで共有してもらい、技術確認を実施した。その場合、課題における明確な目的や意図を伝えることや、具体的な撮影アングルやポイント、秒数などの指示することで意図する内容の映像を送付してもらうことができた。また、参加者のモチベーションが維持できるように現地カウンターパートからフォローしてもらうようにした。

・渡航制限があったため、現地にいける回数が少ないことを予測し、現地で活動している JOCV や、現地で活動している団体の関係者と連携しサポートなどしてもらうことができた。

#### 2) カウンターパートが主体的に活動に取り組んでくれるようになったと考えられる関わり

・本プロジェクトにおいて、初期計画策定の段階で、相手のニーズが明確にあったため、それに合わせ柔軟（内容の修正や追加、コースの組み立て）に対応した結果、カウンターパートのニーズと合致しカウンターパートにオーナーシップを移行した活動できた。技術移転を行う団体として、豊富な講習経験を持っていること、様々な対象に対する講習を行った経験を持っていることが望ましいことが考えられた。

・定期的ミーティングを実施し、密にコミュニケーションを取っていたことでプロジェクトが進むにつれて、活動内容だけでなく、今後の事業の方向性に関する意見交換を行えるようになった。活動期間中は、UHS とオンラインミーティングにてプロジェクトの進捗状況の確認・意見交換を実施したが、定期ミーティングといっても、相手の状況やプロジェクトの進捗状況に合わせ、柔軟に時期設定をすべきである。お互いに負担が大きくなりすぎないように常に配慮することが重要である。毎回のミーティングの終わりに、次回のミーティングの日時を決めるという方法が現実的であると感じた。

・本プロジェクトでは、デバイス等を使って、遠隔で現地に音を送り、聴診器で聞き分けて処置を選ぶといった、現地の受講者にとっては目新しい試みが行われた。これが、現地ラオス人にとっては「わくわく」する体験となり、モチベーションアップになった。実験的な試みでもプロジェクトに参加・関係する人たちそれぞれのモチベーションを尊重し、やりたいことを実現できる場を提供しながら、プロジェクトの中に組み入れることができるべきである。ただし、プロジェクトの関係者が受益者の利益を見失い、プロジェクトをただの実験の場に終わらせるのは望ましくなく、あくまでプロジェクトの目標達成に貢献できるかどうか、現地で求められているかどうかを正しく判断することが重要である。

### 3) JICA 海外協力隊や駐在 NGO 日本人との繋がり、巻き込むみながら発展した活動

・現地隊員や帰国隊員、所属する NGO メンバーを効果的に巻き込みながら成果を発揮できた。参加してくれた方の一人一人に活動に参加する動機や想いがあったため、その方々の想いをくみ取り、活動に参加してもらうことができた。活動メンバーが増えることはといったという点に関しては、コロナ禍で渡航できる人員も限られていたため、もちろん第一にマンパワーの充足という面もあった。しかし、それ以上に「救える命を助けたい」という「想いの重なり」が、更に活動を飛躍させるきっかけになった。

#### (4) 今後の活動・フォローアップの方針：

現在、本プロジェクトの活動実績もあり、UHS は既に新生児蘇生法訓練を各プログラムに導入することを公式に決定し 2023 年には実施を予定している。UHS では、次の 3 つの研修プログラムのカリキュラムを策定している。①4 年次及び 6 年次における中央国立病院での 9 週間の実地研修、②卒後約 2 年間のインターンシッププログラム（年間約 50～55 名）、③インターンシップ後の 3 年間のレジデンシー研修プログラム。各研修プログラムの小児科及び産科における研修プログラムの中に効果的な新生児蘇生法シミュレーション訓練の実施を定着させることにより、ラオス国の新生児医療技術水準の向上に貢献する。

今後も、団体として継続してカウンターパートである UHS が主体的に行う活動をサポートしていきたい。具体的には、①JICA 基金活用事業で育成したインストラクター候補生 9 名による医師を対象とした模擬講習会が実施されること、②カウンターパートである UHS が、継続してインストラクターの人材育成をできる仕組みづくりを支援することである。また、本プロジェクトの対象地域は首都であったが、今後は地方への人材育成の要望もあり、引き続き UHS と協議を重ねて、活動計画を策定予定である。加えて、今回のプロジェクトでは医師のインストラクター候補生の選定であったが、今後は助産師・看護師への支援も UHS は視野に入れており、現地語の教材作成なども活動していきたい。

### 3. その他(エピソード・感想・写真など)

#### (1) 活動中のエピソード・感想など

本プロジェクトにおいては、新生児蘇生法普及に対する想いのある JICA 海外協力隊 OB2 名や現在活動中の協力隊員 2 名、ラオス駐在医療関係者 1 名の NPO の現地活動の参加いただいた。JICA 海外協力隊 OB からは、「帰国後に任国に関わりたいと思いつながらも、なかなか関わる機会が持てなかったため、ラオスに関わる機会ができて嬉しかった」とのコメントがあり、内一名は、今後も継続して活動に参加予定である。現在活動中の協力隊員からは、現地活動に参加後、新生児蘇生法に関する活動の相談を受けるなどし、担当調整員からは、「(現在活動中の協力隊員が)講習会に参加したことが、貴重な活動のヒントになっている」とのコメントをもらった。また、ラオス駐在医療関係者一名より「活動に参加することで(あおぞらの医師の)が自由に夢や情熱を語る姿にエネルギーをもらえる」などとコメントあり、活動に参加してもらうことで、より国際協力の活動の輪を広げることができた。

また、インストラクター候補生の中に、団体の過去の活動で支援したラオス人小児科医師のラオス人が選抜されていた。彼は「仕事は大変だけど、この仕事が好きだ」と話し、インストラクター候補生として意欲的に本プロジェクトにも参加し、嬉しい再会となった。このような巡り合わせは、国際協力を地道に続けていくことの醍醐味を感じた。

上述の経験を踏まえ、これからも多くの方々との「繋がり」を大切に、国際協力を通して多くの方々と「繋がる」そして、「繋げる」活動をしていきたいと考えている。

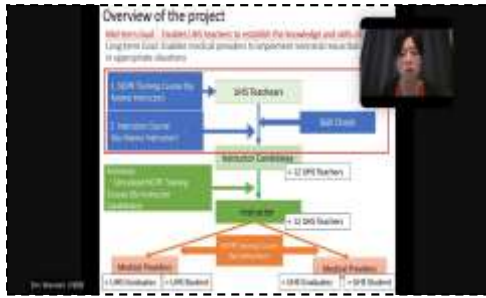
## 「赤ちゃんはその国の未来です」

これは、講師が講義の中で参加者に語り掛ける言葉です。  
引き続き、ラオスの未来へ貢献できる支援を継続して参ります。



皆様のご支援に、心より感謝申し上げます。

## (2) 活動の写真



(オンラインキックオフミーティング様子)



(人形に蘇生法の処置をする参加者)



(オンラインでの講習会開会式)



(現地カウンターパートの講習会準備)



(ラオス人同士で蘇生法について話す)



(オンラインで日本と繋ぎながら進行)



(受講賞授与式)



(第一回講習会の集合写真)





(第二回新生児蘇生法講習会の様子)



(講師の嶋岡より講義の様子)



(候補生の蘇生技術を実際に確認中)



(候補生同士での実技をしている姿)



(症例について真剣に考える候補生)



(第二回講習会後の集合写真)



(第三回講習会の候補生の実技の様子)



(インストラクションしている候補生)





(インストラクターキットの必要物品を考える候補生)



(講師より手書きの症例の用紙を受け取る様子)



(講師より蘇生法のアドバイスを受ける候補生)



(インストラクター候補生認定後の記念撮影)

### (3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

1) 団体としてラオスの新生児蘇生法普及に関する活動行っていたが、コロナ禍にて活動が停滞してしまっている状況であった。そんな中、ラオスでの新生児蘇生法の普及活動の継続の糸口を探し、栃木県の JICA 国際協力推進員を通じて JICA 筑波に相談し、NGO 活動支援の一環である「事業マネジメント研修」や「個別相談」を受講することができ、コロナ期間は PCM・PDM を身に着けることができた。その後、本プロジェクト団体内で立ち上げ、「JICA 基金活用事業」に応募・採択された。本プロジェクトの構想の段階から研修の受講など手厚いサポートがあり、団体としても国際協力活動のノウハウを学べる貴重な機会と環境を提供していただいた。

2) プロジェクトの終盤では JICA 市民参加協力事業紹介セミナー「助かる命を救いたい！～日本の大学・企業・NPO のラオスでの保健医療改善への思いと取組～」(JICA 筑波主催)にお声がけいただき、登壇させていただき、本事業や団体について一般市民の方に知っていただくきっかけを作っていただき、本事業における一般市民の方々からもフィードバックもいただけ、貴重な機会となった。

3) 団体として、このような基金を申請しての活動は不慣れな部分や不安な部分もプロジェクト開始時は多かった。しかし、プロジェクト開始から活動中まで、細かい部分まで JICA 担当職員の方に相談に乗ってもらえたことは大変心強かった。プロジェクト開始時に JICA ラオス事務所とのつなげていただき、活動の方向性の確認や意見交換を行う場を作っていただく機会もあり、活動の輪を広げることやヒントを得られる機会が多かった。

最後に、本プロジェクトを遂行するにあたり、ご尽力いただいた JICA 関係者の方々、そして、プロジェクトの立ち上げから終了まで、終始温かくきめ細やかにサポートいただいた JICA 筑波職員の岡崎有香様に心より感謝申し上げます。